



かつて 子供達を救うため 頑張った大人がいた

心
あ
っ
た
か
ニ
ュ
ー
ス

NMCAA
N03
創刊号

大正9年勝田汽船の陽明丸がロシアの子供800人を救ったお話があります。ロシア革命のさなか治安の悪化で田舎に疎開していた3歳から15歳の子供達がいきました。しかし疎開先の田舎にも戦火が及び子供達の命が危険な状態になりました。子供達を保護していた赤十字はいろいろな国の船舶会社へ子供達の移送を依頼しましたが、資本主義、社会主義の敵対があり、この船舶会社も断ったそうです。そんななかこの難しい依頼を受けたのが日本の勝田汽船の勝田銀次郎さんでした。とはいえ、日本もその当時ロシアとは他の国と同様、良い関係はなくロシア付近では危険も伴い、この仕事自体が倒産に追い込まれてもおかしくなかった状況でした。実際この大仕事の後、非国民扱いされなように関係者は口外しなかつたほどでした。そのような状況でも、反対する社員は一人もいなくなつたそうです。勝田さんは陽明丸を貨物船

から客船へ改造するために多額の私財を投じ、陽明丸は地球を半周して故郷の親元へ送るまで、3ヶ月の航海を成し遂げました。途中、病にかかる子の看病や機雷が残る場所を通るなどの困難も多かつたようです。そして90年たつて、この時助けられた子供達の一人のお孫さんがある日本人に話したことで調査が始まり、みんなが知ることとなつたそうです。

校長先生を助けたいから修学旅行にはいきません。

アメリカのプロフィール高校というところの校長先生が滑膜肉腫という悪性癌にかかつてしまったそうです。それを聞いた生徒が行動を起こしました。その行動とは修学旅行の旅費を校長先生の治療費に使ってもらうということでしたが、この勇気ある決断は満場一致で決定したそうです。

6年間かけたお金の総額約100万円が校長先生に寄付されました。生徒達の言葉に感銘を受けます。

生徒ひとりひとりが校長先生と心で繋がっていた。私たちの為に多くを過ぎ込んでくれた分をお返しをしたい。」校長先生は生徒のことを一番に考えてくれる人。だから私たちも同じように、校長先生のことを助けたい。」

編集後記

新地球文明ブログでは月に一度、世の中のいいニュースをお伝えしていくことにしました。今いろいろなことがありますが、希望は捨てられませんが、その希望は私達人類にあると思いますし、人類でなければ叶えないことだと思えます。実際に心があつたまる素敵なニュースは起きていますので、愛と勇気の起爆剤となれば、うれしいです。創刊号は大人が子供を救った話と現代版の子供達が大人を助けた話。国を超えて年齢に関係ない「愛」という感じとなりました。ロゴにありますが「和言愛語」の意味はおだやかな笑顔と思いやりのある話し方で人に接するということ。大きなことよりも普段の心のありようが言葉になり和のある優しい社会を作っていくように思います。次号は8月1日です。